

講演する中村武彦氏（國學院大學院友会館で）

年慰霊祭」（主催＝同実

同日午後六時から、

てゐた」と語った。

市内の児童養護施設「小

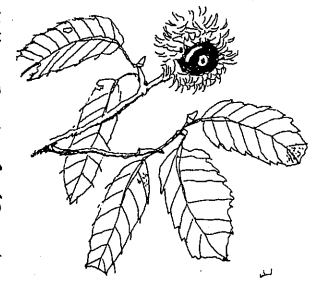
カット・山内 昇

霧霞の中、遙かに見上げる樹齡三百年の杉木立、澄み渡る清らかな深山の冷気。舞ひ奏でる神楽の全てが霊山の奥深くに染み渡り、まるで我が身まで吸ひ込まれるやうな感覚を覚えた。

去る十月二十六日、我が万九千社立虫神社神代神楽社中一行は生涯忘れえぬ奉納神楽を仕へ奉ることとなった。場所は、兵庫県養父郡八鹿町の妙見山、名草神社。標高八〇〇メートルを超える但馬の奥山に神社はひっそりと鎮座してゐた。



けて神仏分離が図られ、今日のごとき壮大な社殿建築の基となる寛文の大造営が成就する。その際、大社本殿の御用材として彼の地の大杉が奉獻されたのである。その縁により大社にあった三重塔は、



遙々日本海をわたり、およそ三千五百人の肩に担がれ高山を越え、但馬、妙見山に再建された。見事秀麗なる姿を現存に伝へる由縁である。

幾年月の大雪、激しい風雨にも耐へながら大切に護り継がれ、明治三十七年には国宝に、戦後は国の重要文化財に指定されてゐる。そして、今年、国指定百周年の記念すべき祝ひ年を迎へたのである。

錦田 剛志

その神さびた境内の一角に、かつて戦国の世、出雲国の大名、尼子経久が出雲大社に寄進造営したといふ三重塔が天空目指し倭立してゐる。御存じのとほり、江戸時代前半、出雲大社では全国に先駆

出雲神楽 妙見に舞ふ

さて、御神縁とは不思議なものである。夏頃、八鹿町の

某氏から、出雲から何か出雲大社に縁の神事芸能を奉納することはできないのか、と知り合ひを通じて話があった。当社の神楽はいはゆる神主神楽の伝統を護り、毎年五月には、出雲大社に奉納させていただいてゐる。また、筆者の祖はかつて、大社に注連主といふ被への専職、湯立神楽、神事芸能の担当神職として長らくお仕へしてゐた。何やら

神々に誘はれるかのごとく順風に入るとは進み、この栄えある祝賀の日に御奉仕する運びとなつたのである。

いよいよ舞ひ始めた。この日はかりは、普段賑やかな社中皆の顔に緊張感がみなぎつた。頬はひきしまり、眼は研ぎ澄まされ、口もとをきつと結んでゐた。謡・笛・鼓・胴・舞……、参拝者には如何程のものに映つたかは知る由もない。しかし、少なからず、社中の神主も氏子も老いも若きも、大社に縁の神域、三重

塔の御前でもかくも一身入魂に舞ひ奏でることのできる幸せを身に染みて感じてゐた。朱色の塔の美しさに応へるべく一点の曇なき真心で仕へ奉つたことは自信をもって言へるだらう。

夕暮れ迫る頃、八戸（八岐大蛇退治）を舞納め、一同で八雲立つ出雲八重垣妻隠みに八重垣作るその八重垣を……と詠じた。

境内に万雷の拍手が鳴り響く頃、人知れぬ感涙が頬をつたつた。遙かに御本殿を仰ぎ悠久なる大社と妙見の歴史に想ひを馳せ、国の弥栄と万邦の浦安を心静かに祈念する自分がある。彼の地での一期一会、幼き頃から共に歩む誇らしき我が氏子社中の皆々、全ての縁に感謝したい。出雲神楽を妙見に舞ひ奏でた一日は、私にとつても記念日となった。歴史を背負ひ今を生きる神主に生まれきて本当に良かった、心からさう思へる秋晴れの一日であった。